【vol.30】楽曲の成り立ちを考えてみる　～その 2～

こんにちは、大沼です。

『楽曲の成り立ちを考えてみる～その 2～』と言う事で、今回もやっていきましょう。

前回は、ダイアトニックコードの基本的な考え方の解説で終わってしまいましたが、
今回こそは、課題曲に入っていきたいと思います。

と、言いつつも、テキストを作ってみたら、
イントロの 4 小節しか進まなかったんですが・・・。

まあこれも、極力細かく解説している代償だと思って
もう、じっくりとやって行くことにしましょう。

その解説も、最近覚えたばかりの音楽用語のオンパレードで、
文章がややこしくなってますし。

何事も最初が肝心ですからね。

さて、前回の内容をざっと確認しておくと、『let it be』という楽曲は、

・key=C である

・key＝C なので、C メジャースケールがこの曲の基準スケールとなる

**・主に key=C のダイアトニックコードである、C、Dm、Em、F、G、Am、Bm(♭5)の
7 つのコードで構成されている**

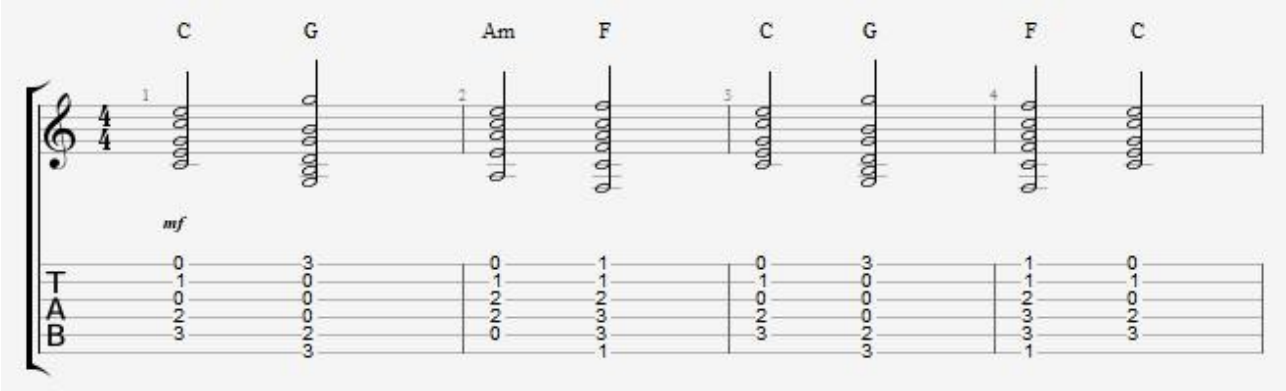
と、こう言うことでした。

これらを踏まえた上で、早速、実際のコード進行を確認していきましょう。

まずはイントロからです。細かくピアノの音の動きを採ると、もうちょっとコード表記を動かしてもいい気もしますが、理論をわかりやすくするために、シンプルにしたものを見ていきます。

Copyright (C) 2015 shunichi onuma All Rights Reserved

※『Let it be』 0:00～



譜面の通り、大きくは 2 拍ごとのコードチェンジです。

見ての通り、C キーのダイアトニックコードの中から、C、G、Am、F のコードが使われています。

この曲のことをまったく知らない状態でも、理論がわかっていると、
このコード進行を見ただけで曲の key が判別できてしまいます。
(※少なくともこの 4 小節間の部分は)

なぜなら、**この種類のコードの組み合わせが出てくるキーは、C キーしかないから**、ですね。
(※わかる人にはわかると思いますが、Am キーについてはマイナーキーの解説の時にやります)

ここでもう一度、C キーのダイアトニックコードを見てみましょう。

1、C
2、Dm
3、Em
4、F
5、G
6、Am
7、Bm(♭5)

この中のコードの種類に注目してみると、

メジャー系のコードが、C、F、G の 3 つ。(※4 和音ならば CM7、FM7、G7)

マイナー系のコードが、Dm、Em、Am の 3 つ。(※4 和音ならば Dm7、Em7、Am7)

マイナー♭5 のコードが、Bm(♭5)の 1 つ(※4 和音ならば Bm7(♭5))
(※Bm(♭5)も、一応マイナー系のコードですが、とりあえず今は分けて考えておきましょう)

Copyright (C) 2015 shunichi onuma All Rights Reserved

ですね。

その key とスケールに対応したダイアトニックコードというものは、仕組み上必ず、

メジャー系のコードが 3 つ、マイナー系のコードが 3 つ、マイナー♭5 のコードが 1 つ、

と、このような数に分かれます。
(※通常のチャーチ・モード準拠の曲であれば)

これは基本的な仕組みとして、文字通り『必ず』こうなります。

これをベースに、必要に応じて特殊なコードアレンジをしたりしなかったりするわけですが、
それは、最初にこのルールがあってのものです。

この辺り、重要な事なので、もう少し、詳しく見ていきましょうか。

まず、key が決まって(決めて)、それと同時に、その key に対応したスケールが決まりますね。

例としては、いつも通り、key=C で、対応するスケールは C メジャースケールでいきましょうか。

次に、C メジャースケールの構成音を、トニックである C 音から順番に並べます。

1、C
2、D
3、E
4、F
5、G
6、A
7、B

構成音は 7 音なのでこうですね。

ここから、前回解説した、C メジャースケールのそれぞれの音をルートにして、
1 音おきに音を重ねてコードを構成すると、

1、C　　(CM7)
2、Dm　　(Dm7)
3、Em　　(Em7)
4、F　　(FM7)

Copyright (C) 2015 shunichi onuma All Rights Reserved

5、G　　(G7)
6、Am　　(Am7)
7、Bm(♭5)　(Bm7(♭5))

と、自然とこのようになるわけです。

これはトーナル・センターをどの音にして、どのメジャースケールに当てはめてみても、
この順番で、この(種類の)コード群が出来上がります。

試しに他の key でもやってみましょう。

他にもう 1 つ、とある楽曲があったとして、key＝E だとしましょうか。

E キーということは、基準スケールは E メジャースケールですよね。

トニックである E 音から、メジャースケールの全全半全全全半のインターバルで
音を並べるとこうなります。

1、E
2、F♯
3、G♯
4、A
5、B
6、C♯
7、D♯

要するに、E メジャースケールの構成音は、E、F♯、G♯、A、B、C♯、D♯の 7 音である、
ということですね。(※ギターの指板上で確認してみましょう)

で、この構成音をルートに、音を積み重ねて、E キーのダイアトニックコードを構成すると、

1、E
2、F♯m
3、G♯m
4、A
5、B
6、C♯m
7、D♯m(♭5)

Copyright (C) 2015 shunichi onuma All Rights Reserved

と、こうなるのです。

こうなるのです、と言われても・・・、と思うかも知れませんが、
自然とこうなってしまうのですね。

先にも書きましたが、どの音をトーナル・センターにしても、
必ずこのダイアトニックコードの構成になります。(※メジャーキーの場合)

仕組み的にここまで限定されるのですから、
まったく知らない曲でも、ベース音やコードを 2 つ 3 つ聴き取れれば、
かなりの確率で、その曲の key がわかります。

この様な音楽の構造があるので、let it be という曲自体を知らなくても、
耳コピと音楽理論の複合技で、キー判別から曲全体のコピー、把握へと繋がるのです。

とまあ、この一曲だけを見てみても、まだあまり実感が湧かないかもしれませんが、
今後も引き続き、色々な楽曲で理論の使い方やコード分析の内容はやっていきますので。

というか、まだ let it be も全部終わっていないですしね。

では、短いですが、今回は以上になります。

今回学んだ事としては、

『key と、その key の基準スケールからのダイアトニックコードの導き方』

ですね。

まだまだ知識の扱いに慣れないかもしれませんが、
こう言った事をずっと考えて音楽をやってると、キーを確認しただけで、
パッと 7 つのダイアトニックコードが頭に浮かぶようになったりします。

初期段階では、コピーや作曲をしていてキーを決めたら(分かったら)、
ノートなどに書き出して、パッと見れるようにまとめておくといいですね。

Copyright (C) 2015 shunichi onuma All Rights Reserved

今回例に挙げた、C と E 以外のキーでも、
同じ様にダイアトニックコードを割り出してみましょう。

ではまた次回。

ありがとうございました。

大沼

Copyright (C) 2015 shunichi onuma All Rights Reserved